

毎年、イースターの3週間後は、「良い羊飼いの日曜日」ということで、日本聖公会のふたつの神学校のために祈り、そのために今日の信施金をささげることになっています。以前、文語の祈祷書時代は、イースターの2週間後が「良き羊飼いの主日」になっていました。そして、毎年今日の聖書の箇所が読まれました。また、昔も今もそうですが、司祭按手式の時に読まれる福音書のひとつに選ばれています。

以前、司祭按手式の説教で話したこともあるのですが、私が神学校の学生だった時、それはもう40年以上前のことです、1年生の時と、3年生の時、大変印象に残った出来事がありました。

1年生の時は、この「良き羊飼いの主日」から始まる週の金曜日。神学校の聖餐式で聞いた説教です。その時、説教した先生は、「イギリスに研修に行った帰りに、イスラエルに寄って、羊を見てきた」と言われるのです。そして、「君たちは、羊と言え、緑の牧場に寝転がったり、走ったりしている、きれいな白い羊を思い浮かべるだろう。でも、実際のイスラエルの羊は、ブタみたいなものだ。草は少ないし、埃っぽいところに、泥まみれで、羊の毛も、茶色になっている。」と言うのです。

私はその時の説教は、あとウトウトと寝てしまって、終わりごろに、その先生が「牧師は、羊飼いじゃない。たくさんいる羊たちの一匹。羊のリーダーだ。」と言ったことだけ、覚えていました。

それから、2年後、3年生になった時の、「良き羊飼いの主日」の前日である、土曜日のことです。その頃には、土曜日に、聖書研究という時間があつて、1年生から3年生、そして教員たちも一緒に集まって、翌日の聖餐式で読まれる福音書を使って聖書研究をしていました。1年生や2年生は、聖書の内容試験というのをやって疲れているので、3年生が聖書研究を順番に担当してゆくのです。

私がたまたま、この「良き羊飼いの主日」の聖書研究を担当することになりました。

「良い羊飼いは、羊のために命を捨てる」という最初の言葉が強烈でしたので、これを材料にして、話しました。

「明日は、良き羊飼いの主日だ。全国の教会の人々が、われわれのために祈ってくれる。しかし、われわれは、そんな教会の人々のために、命を捨てる覚悟はできているのか？」と問いかけました。

ところが、いろんな感想があつた後、ある先生が、「君は、牧師が羊飼いだと思っているのか？」と質問してきました。何を今さら、と思いまして、

「そんなのは、当たり前でしょう。牧師とは、牧場の師匠と書きます。羊飼いを象徴している言葉です。」

そして、私はそれだけでは説得力がないと思って、ヨハネの福音書の最後の所。復活したイエス様が、弟子のペトロに、三回「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」と問われた話を持ち出しました。

「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存知です」と答えると、そのたびに「羊を飼いなさい。」と言われたことを例に挙げたのです。「羊を飼うのが羊飼いでしょう。弟子のペトロが最初のローマ教皇になったのだから、聖職は羊飼いだということでしょう。」と言いました。

するとその先生は、笑って、「そこには、【わたしの羊】と書いてある。」と言うのです。私はそれを聞いて、愕然としました。

「ああそうか。イエス様の羊を、牧師は飼うのか。それじゃ、羊飼いはイエス様なんだなあ。」と思われました。そして、その2年前に、あの説教で、最後に、「牧師は、羊飼いいじゃない。たくさんいる羊たちの一匹。羊のリーダーだ。」と言われたことを思い出したのです。

それから、聖書研究の話に戻りますが、私の主張に注意をした先生は解説して、
「牧師が失敗しやすいことのひとつは、牧師になったとたん、信徒を自分の持ち物であるかのように思い、『わたしの羊』とか『わたしの教会』という言い方をして、自分の権力を振り回してしまうことだ。」と言われました。

なるほどなあ、と今から思えばそんなことをなつかしく思い出します。

それから、約40年。教会で働いたり、信徒の人々と一緒に仕事をしている時に、「牧師は、羊のリーダーだ。」とだけ言っていたのではだめではないか、と思う経験をしました。教会に幼稚園があったり、所属する信徒の人が多い教会などで牧師をしていると、日曜日以外にも幼稚園や教会の定期的なプログラムがあって、それに時間を取られてしまいました。

その結果、信徒の人たちがどんな状況にあるのか、把握できていない、ということがよく起きたのです。特に、「やりにくいなあ。」と苦手になっている人々とは、顔を合わせる機会が少なくなると、電話をかけて安否を問うことも、怠るようになるのです。

今日の福音書の中に、

『10:14 わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。
10:15 それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。』

という言葉が出てきます。命を捨てるだけではなく、お互いがよく知りあっている、ということです。親しい人とは、特に用もないのに電話したりしますが、「同じことを他の人にも行っているか。」考えてみれば、なかなかできていません。

「そんなことは、良い羊飼いであるイエス様だからできるんだ。人間の私には無理だ。」と開き直りたい気持ちになることがあります。

ところが、ある時、私は「聖餐式における懺悔の研究」という論文を読んでいました。祈祷書の170ページには、「懺悔」というのがあって、最初に司祭が自分の犯した罪の懺悔をし、みなさんが、神様にとりなしの祈りをしてくださる。そして、今度は皆さんが懺悔をして、司祭が赦しの祈りをします。

司式者と会衆が、お互いに懺悔ととりなしの祈りを仕合う、あたりまえの礼拝の光景です。しかし、これを行っているのは、世界の聖公会の中で、日本聖公会だけらしいのです。外国では、聖餐式の中で、懺悔するのは、会衆だけで、司式者は、赦しの祈りをするだけらしいのです。

私は何度か、外国での聖餐式に出ましたが、司祭には懺悔文はありませんでした。

「何だ。外国の司式者は、懺悔もしないのか。」と思ってしまうのですが、事情はそんなに簡単なことではないようです。元々、司式者は、礼拝の前に、サーバーと一緒に懺悔をしていた。そして、礼拝の中では会衆が懺悔をしていたらしい。そして、その懺悔には、それぞれ、別の目的があったのです。皆さんが懺悔するのは、聖餐を受けるためですが、司祭が懺悔するのは、聖餐式を司式するためだ、というのです。説明の箇所を読んでもみます。

『司祭が聖餐式を行なうのはキリストが行なわれたことにならい、キリストご自身が献げたとおりにそれを献げることを続けるためという聖餐理解に基づいて、まずそれを献げる司祭が罪のないキリストのようになることが必要と考えられる。』

イエス様の始められた聖餐式を、罪深い、不完全な司祭が行なうためには、懺悔が必要だ、ということです。

逆に言えば、本当の羊飼いはないが、その仕事をするように命じられた牧師は、失敗を懺悔しながらも、その務めを果たそうと、努力する人でなければならない、ということなのでしょう。

今日の福音書の中に出てくる、『羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。』、ということが、いつも、問われてきます。

牧師は、イエス様に雇われているわけですが、逃げ出すことなく、懺悔しながら、羊飼いの弟子として、働くことが必要なのではないのでしょうか。

『10:14 わたしは良い羊飼いです。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。
10:15 それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。』

牧師は、神様のことをよく知り、また信徒の皆さんともお互いによく知り合い、お互いのことを気づきあうように、成長することを、今日の福音書は私たちに命じているように思えます。